


 書評

東京都立松沢病院 130 周年記念事業後援会 編

東京都立松沢病院 130 周年記念業績 選集 1919-1955

わが国精神医学の源流を辿る

笠井清登

本書は、日本の公的精神科病院の祖であり、現在も中心的存在である都立松沢病院の創立 130 周年を記念して、前院長松下正明氏らが、同病院の研究黄金時代ともいえる 1919~1955 年にかけての業績のうち、後世に残すべき重要なものを選集したものである。

林樟，秋元波留夫による「精神分裂病の予後及び治療」(第 38 回日本精神神経学会総会宿題報告，1939)は，東京大学病院精神科と松澤病院を一定期間に退院した精神分裂病(現在では統合失調症，当時の病名をそのまま用いた，以下同様)患者全員に対する予後と治療成績の調査報告である。予後良好因子について，女性，非定型性，急性発症を挙げており，まだ抗精神病薬が登場していない時代のデータであるが，我々の知る疫学的エビデンスとよく一致している。完全寛解の症例が数例提示されており，顕著な幻覚妄想状態がみられたものの，最終的に社会適応がよく，回復したと云ってよい経過が，抗精神病薬がない時代にも存在することを改めて認識させられる。治療については，インスリン療法の効果について検討しているが，一般的自然寛解率を上回ると結論づけているものの，本療法に特異的な治療効果は見いだせず，本来的寛解傾向を強化するものである，と慎重な付記もみられる。発病より治療までの期間が短いほうが予後がよいことも明確に示されており，DUP (duration of untreated psychosis) と予後の関係を最近メタ分析で確認し，早期介入を叫ぶ現代精神科医には衝撃的である。

内村祐之らによる「東京府下八丈島住民の比較精神医学的併びに遺伝病理学的研究」(精神経誌 44, 1940)も大変興味深く，生物学的精神医学に関心が

ある人も，社会精神医学に関心がある人も，必読の文献である。大規模な population based study を行い，精神分裂病の頻度が 0.91% で，当時の文献資料による 0.4% 前後よりはるかに高いことを見いだしている。また，詳細な家系調査から，精神分裂病の親族の発症危険率が同胞(第一度親族)で 8.19%，甥姪(第二度親族)で 1.74% と報告している。精神分裂病や躁うつ病(双極性障害)の多発家系の報告もきわめて興味深い。離島であり，今日では個人情報保護などの倫理的問題があるため困難とは思いますが，遺伝性の医学疾患では家系の同定が病因解明の出発点となってきたことや，スコットランドの多発家系から DISC1 が同定され，統合失調症の神経生物学的研究を格段に発展させてきたことを考えると，精神疾患の解明における多発家系の同定の重要性を再認識させられる。

以上，多数の収載論文の中から 2 編を紹介したが，豊富な臨床経験や精緻な臨床観察を出発点として，質の高い臨床研究に結びつける当時の日本の精神医学研究者の慧眼には驚きを禁じえない。編者らの後世に残すべき論文の選択は非常に的確であり，精神医学の臨床や研究に従事する私たちにきわめて本質的な示唆を与えてくれる。いわゆる古典のススメではなく，精神医学研究の源流と本質を知るために，本書をあえて若い世代の精神医学・医療従事者に必読書として薦めたい。

(東京大学大学院医学系研究科精神医学)

●B5 728 頁 2009 定価 13,650 円(本体
13,000 円+税) 日本評論社